

桃山学院教育大学「教育実践紀要」第5号発刊にあたって

人間教育学部学部長 中村浩也

本学の「教育実践紀要」は本刊で第5号をむかえる。この間、教育実践にかかる様々な報告がなされてきたが、本号においても計8編にわたり幅広い領域から貴重な知見を得ることができた。これも、日常の教育実践の中にあつて問題意識を持ち続け、その解決に向けたアプローチを怠らない各位の成果であろう。

そもそも、教育実践とは個々の研究者等が意図的・計画的に働きかけた実践知の結晶であるが、一方で論文化することは困難であることが多い。それは、従来の研究論文で重視されてきた信頼性や再現性に課題が生じやすいことに集約される。しかしながら、教育実践の現場で日常的に発生する諸課題の検証は、伝統的な手法とは異なる研究デザインによって、具体的解決策を示してきたことも事実である。

教育実践は研究者自身の視点が通常の論文よりも明確になりやすい上、研究者自らが対象に直接関与することで、独自性や新規性を見出そうとするものである。さらに、それが個別のかつ限定的であるにもかかわらず、普遍的な真理を見出すことも期待できる。

近年は当事者研究といわれる研究領域が注目されている。これは実生活の中での生きづらさや困難な体験を研究テーマとして再構成し、自分なりの関わり方を見出そうとする領域である。自身の体験を内省し、考察し、外部へ発信することは、似通った苦労を抱える人々との共感やつながりを見出し、困難からの回復の糸口になりうる。

本号に掲載する論文においても、それぞれの個別の事情を背景に展開されている。これは、教育実践を通じて得られた知そのものであり、その根底には科学論文で求められる「エビデンス」では解決しなかった臨床的な諸課題に対して、ともに取り組み解決していこうとする姿勢の表れといえよう。

研究者独自の視点を通じて得られた実践知を共有するとともに、更なる議論を通じて、あらためて「教育とは何か」についての考察を深める機会になれば幸いである。